

2023 年 8 月 27 日（日）「四つの生き物による絶え間なき賛美」

ヨハネの黙示録 4:1-11（その2）

1 その後、私が見ていると、開かれた扉が天にあった。そして、先にラツパのような声で私に語りかけた、あの最初の声があった。「ここへ上って来なさい。そうすれば、この後必ず起こることをあなたに示そう。」2 私は、たちまち霊に満たされた。すると、天に玉座があり、そこに座っている方がおられた。3 その座っている方は、碧玉や赤めのうのように見え、玉座の周りにはエメラルドのような虹が輝いていた。4 また、玉座の周りに二十四の座があり、それらの座には白い衣を身にまとい、頭に金の冠をかぶった二十四人の長老が座っていた。

5 玉座からは、稲妻、轟音、雷鳴が起こった。また、玉座の前には、七つの松明が燃えていた。これは神の七つの霊である。6 また、玉座の前には、水晶に似たガラスの海のようなものがあった。この玉座の中央とその周りに四つの生き物がいたが、前にも後ろにも一面に目があった。7 第一の生き物は獅子のようであり、第二の生き物は若い雄牛のようで、第三の生き物は人間のような顔を持ち、第四の生き物は空を飛ぶ鷲のようであった。8 この四つの生き物には、それぞれ六つの翼があり、その表にも裏にも一面に目があった。それらは、昼も夜も絶え間なく唱え続けた。「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、全能者である神、主。かつておられ、今おられ、やがて来られる方。」

9 これらの生き物が、玉座に座り、世々限りなく生きておられる方に、栄光と誉れと感謝とを献げる度に、10 二十四人の長老は、玉座に座っている方の前にひれ伏し、世々限りなく生きておられる方を礼拝し、その冠を玉座の前に投げ出して言った。11 「私たちの主、また神よ、あなたこそ、栄光と誉れと力を受けるにふさわしい方。あなたは万物を造られ、万物はあなたの御心によって存在しました造られたからです。」

【序論】

ヨハネの黙示録は不思議な世界が広がっており、一読するだけでは理解できない内容が多いです。地球上には存在しない生き物がたくさん登場しますが、それでいてどこか私たちが知っている生命体と似たところがあり、それが人間にも理解できる言葉を話し、神とも対話をする。今日の箇所にも謎に包まれた表現が多く出てきますが、これらは調べることによってある程度意味が分かってきます。それは「神の国の隠された秘密」ではありますが、読者にはその神秘を垣間見ることが許されているのです。聖書を読む人に特別に開き示された啓示として、どうにか人間世界の言語で、人間世界にあるものに譬えて、それを表そうとしている。すべてを理解できる日がやがて到来しますが、現時点で私たちはこの記事を地上の礼拝との関わりにおいて読むことができます。この特権を最大限に味わうため、豊かな想像力をもって読み解いてまいりましょう。神の国を理解するためには、既存の科学は一旦脇に置いて、超越的な世界に入り込んでイメージすることが大切です。私たちが今見ている世界は、宇宙レベルでは極めて限られた情報に過ぎません。

【本論】

本論 1. 天の玉座

玉座からは、稲妻、轟音、雷鳴が起こった。また、玉座の前には、七つの松明が燃えていた。これは神の七つの霊である。また、玉座の前には、水晶に似たガラスの海のようなものがあった。(4:5-6a)

「玉座」とは、王の王、主の主である神が座しておられる天の御座です。「稲妻」と「雷鳴」は最後の審判との関わりを持ち、旧約聖書では神の驚くべき威光と力を表すものとして描かれていました。

三日後の朝、雷鳴と稲妻と厚い雲が山の上に臨み、角笛の音が極めて力強く鳴り響いたので、宿営にいた民は皆、震えた。(出 19:16)

これは、神がイスラエルの民に十戒を授けるためモーセにシナイ山を登るようお命じになった箇所です。民は山の麓で神の威光が現れたのを見て恐れ慄きました。

「七つの松明」とは、神の御前で仕える7人の御使いを指し、2～3章で7つの教会に遣わされた神の使者とも考えられそうです。

「水晶に似たガラスの海のようなもの」とありますが、もはや地上の言語で表す限界があるのでしょうか、聖さと美の極みであり、荒れ狂う海を完全に掌握し鎮静化した神の勝利と平和を表している。歴代誌などを読みますと、地上の神殿には青銅の「鑄物の海」があったという記事に出会います。

彼はまた、鑄物の「海」を造った。縁から縁までが十アンマの円形で、高さは五アンマで、周囲は測り縄で測ると三十アンマであった。「海」の下には牛の像がその周囲を取り巻いていた。牛の像は、一アンマにつき十頭の割合で「海」を取り巻いていた。牛の像は二列であったが、これは「海」の鑄造のときに鑄られたものである。「海」は十二頭の牛の上に据えられていた。三頭は北を向き、三頭は西を向き、三頭は南を向き、三頭は東を向いていた。「海」はそれらの上にあったが、牛の後部はすべて内側に向いていた。「海」の厚さは一トファで、縁は杯の縁の仕上げのように、百合の花をかたどって造られていた。容量は三千バトの水が入るものであった。彼はまた、洗盤を十個作り、右側に五個、左側に五個並べた。焼き尽くすいけにえの用具を洗い、そして清めるためである。一方、「海」は祭司が身を洗うために用いられた。(Ⅱ歴代 3:2-6)

私はここに出てくる「海」が何を意味するのかが分かりませんでした。建物の中にどうやって海を作るのだろうか。おそらくこれは、今日の黙示録の記事との関わりから理解することができでしょう。神殿の中の祭具の一切の形状を指定されたのは神でありますから、天の玉座にあるものを模して作るようお命じになったと思われます。鑄造とは、金属を溶かして鑄型に注ぎ込んで形にする技術であり、祭司が身を洗うために作られた丸い容器ですから、それなりの大きさであったことが想像できます。天の玉座では、御使いが神に仕えるに際して使用されているものと考えられそうです。

本論 2. 四つの生き物

この玉座の中央とその周りに四つの生き物がいたが、前にも後ろにも一面に目があった。第一の生き物は獅子のようであり、第二の生き物は若い雄牛のようで、第三の生き物は人間のような顔を持ち、第四の生き物は空を飛ぶ鷲のようであった。この四つの生き物には、それぞれ六つの翼があり、その表にも裏にも一面に目があった。(4:6b-8)

ここに出てくる「四つの生き物」について考えてみましょう。これらは最高位の御使いであり、その前後一面に散りばめられた「目」はあらゆる方向のものを見極める能力を意味します。「四」は完全性を表し、この生き物が自由自在にどの方向にも動けることを表しています。四つの生き物に具わった力はそれぞれに異なりますが、それらは一丸となってある目的を果たし続けています。その主な役割は、天の御座を守ることと神の民の礼拝を導くことです。

獅子……猛獣の代表／支配力

雄牛……家畜の代表／突進力

人間……人間の代表／知性

鷲……鳥類の代表／俊敏性



アートバイブルより

「四つの生き物」はエゼキエル書にも出てきますが、そこではより具体的な情報が提供されています。

また、その中には四つの生き物のようなものがあつた。その姿は人のようであつた。それぞれに四つの顔があり、四つの翼があつた。その足はまっすぐで、足の裏は子牛の足の裏のようであり、磨かれた青銅のように輝いていた。また、その翼の下には、四つの方向に人の手があつた。四つの生き物には顔と翼があり、翼は互いに触れ合い、進むときは向きを変えず、それぞれ前方に進んだ。顔のようなものは人の顔であり、四つとも右に獅子の顔、四つとも左に雄牛の顔、四つとも後ろには鷲の顔があつた。顔はそのようであつた。翼は上方に広げられ、一対は互いに触れ合い、一対はその体を覆っていた。それらはそれぞれ前方に進み、霊の行く所に行き、進むときその向きを変えなかつた。生き物の間に炭火のような姿が見え、生き物の間を行き来する松明の姿のようであつた。火は輝き、その火から稲妻が出ていた。生き物は、稲妻のひらめきのように、行ったり来たりしていた。(エゼキエル 1:5-13)

「四つの生き物」なる四人の最高位の御使いは、全地をくまなく見渡し、地上のすべての出来事の真相を見極めている。何者も彼らの視線を逃れることはできません。全知全能なる神はこれらの御使いに仕えられながら、世界中を見渡しておられます。

しかし、神に反逆する勢力もまた「目」を象徴として、自分たちこそが世界を掌握し人民の行動を監視しようとしています。神の位置に自らを置こうとする者が暗躍する世界が広がっていますが、まことの神は更に上から彼らを見渡しておられる。

本論 3. 絶え間なき賛美

それらは、昼も夜も絶え間なく唱え続けた。「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、全能者である神、主。かつておられ、今おられ、やがて来られる方。」(4:8b)

四つの生き物は絶え間なく賛美し続けている。これは強要された賛美ではなく、聖なる神の御前にあつては礼拝せざるにいられない状態になるのでしょう。彼らは「聖なるかな」と三度繰り返しています。これは三位一体なる神の各位格への呼びかけであるとともに、過去、現在、未来の全領域を支配しておられる神への賛美とも言えるでしょう。同様の賛美はイザヤ書にも見られます。

ウジヤ王が死んだ年、私は、高く上げられた玉座に主が座っておられるのを見た。その衣の裾は聖所を満たしていた。上の方にはセラフィムが控えていて、それぞれ六つの翼を持ち、二つの翼で顔を覆い、二つの翼で足を覆い、二つの翼で飛んでいた。そして互いに呼び交わして言った。「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな。万軍の主。その栄光は全地に満ちる。」(イザヤ 6:1-3)

それにしても、常に賛美し続けるのは大変なのではないかと考えたことがありました。神の民は永遠の神の国において礼拝し続けると言われます。礼拝とは、造られたすべてのものの目的であり、本来のあり方であると。このことは、被造物のその他の営みが失われるということの意味するものではありません。何事をなすにもそれが礼拝と直結しているということだと私は理解しています。

生来の人間の生活には「礼拝」がなく、自分の思いのまま突き進むものとして始まりました。神を知らないところからこの人生はスタートしたのです。聖なる方を畏れ敬うという生き方は、最初から備わっていたわけではありません。私の幼少の頃の記憶として、こんなことがありました。私は教会でもらった聖句入りの鉛筆を使っていたのですが、学校でその鉛筆を見た同級生からよくからかわれていました。「互いに愛し合いなさい」という聖句を見ると「気持ち悪い」と言ってくるのです。神のことばが心に書き記されていない人にとって、そのことばは聖なる響きを持たないのでしょう。ホサナクラブに来ていた子どもの中にも、主の祈りを唱えている最中に金突きをしてくるような不屈き者がいました。

今日の「四つの生き物」が絶えず賛美をする姿は、私たちが全生活を礼拝としていくべきことを教えています。生まれてくることも、食べることも、学ぶことも、仕事をすることも、家族や友人と時間を過ごすことも、そして死ぬことも、すべてが礼拝となるのです。礼拝とはすなわち、その営みの背後に神がおられるのを認めることであり、神の目的のためにそれをささげていくことであります。そして、私たちの全生活を礼拝とするために、週の初めの日を主にささげ、共に集まって礼拝をするのです。そこで歌われる賛美が私たちの残りの六日間の生活の中に浸透していく。私たちが誰かと関わる時、料理をする時、物を作るとき、誰かに何かを教える時、習う時、話を聞くと、まことにどんなに小さな営みの中にも主がそこにおられることを見出していくことができるのです。

【結論】

今日は、天の玉座の下を飛び交う「四つの生き物」の賛美する姿を垣間見ました。やがて私たちは、彼らに導かれながら主を賛美するようになるでしょう。いえ、今私たちのささげる賛美も、実は彼らによって導かれているのであり、私たちの生活全般が礼拝となるように、彼らが常に働きかけてくれているはずです。イザヤもエゼキエルもダニエルもヨハネも同じ光景を見ました。私たちも本書を通して、この預言者たちが見たと同様の幻が与えられています。永遠の賛美、絶え間ない礼拝は、既に始まっているのです。

【祈り】

永遠に礼拝されるべき天の父なる神様。私たちの地上の礼拝が、実は天の礼拝によって導かれているということ、御使いの中の御使いによる賛美が先行しているということを、今日の御言葉を通して学びました。私たちの賛美もまた天に届いているということを信じて歌います。そして、世における戦いの只中にある者を励まし、どのような局面においてもあなたの守りと栄光とを現してください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
預言者たちに天上の礼拝を垣間見せ、大いなる賛美の中へ導き給うた、父なる神の愛、
地上にある「戦いの教会」に、神の栄光を現し給う、主イエス・キリストの恵み、
生活のあらゆる局面に、礼拝の喜びを増し加え給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。